

柳菴雜筆

三

15
1489
3

門 5
號 1489
卷 3



柳菴雜筆卷之三目錄

農工商乃恒産

丙午丁未歲

百姓屋敷乃宣法

日本上古人數

什一

熊谷直之乃小性忠烈之事

里見家給金乃制

知行一貫文と又石と相並の事

之里ん酒乃價

玄園 東山御所玄園以下の
古圖 禪家玄園

嵯峨大覺寺玄園
旧十九院唯念寺玄園

早稲田大學圖書館
3411.6
書

柳菴雜筆卷之三目錄終

柳菴雜筆卷之三

栗原信宛 著

○良農一人婦一人劇敷時了日雇一人ふく田一町を
 耕と種一斛蒔く穀四十斛もう里を獲へく摺く米廿
 斛も有へく御年貢諸掛五斛許を納めく残り五斛許
 あ里其内五斛八回乃至へ納め金く十斛許を作得る
 里又畑五段もう里を耘く大根二萬五千根を泊へく
 一段五十賣く百廿五貫文許ふかふ一根五文二以内
 根の積足 糞の價五十貫江戸へ舟賃二兩二分運賃に十貫を引
 金廿八貫七百八十文り得るなり組以五段乃内之段
 へ麦を作し六斛許も泊へく御年貢三貫も上納く

柳菴雜筆卷之三

廿五貫七百五十文金に兩と米十斛麦六斛を一丈一
婦一年乃辛苦料許と以と知へ一是内史婦の食麦三斛六斗
米一斛餘を引又日雇乃被拵麦一斛八斗米五斗を引
正月餅等乃米三斗餘と獲穀一斛を引又子女あきハ
其食料一人ノ九斗許と積又親屬故舊乃會食二斗
を引ハ米七斛二斗を獲金七兩餘了充へ一畑乃得
分と合せ十一二兩過と塩茶油紙乃費二兩許農具
乃價家具乃料二兩許薪炭等一兩餘史婦衣服子女乃
料共々一兩二分餘春を迎へ歳を送り魂祭と年忌
佛事乃入用二兩餘日雇賃一兩二分餘親屬故舊乃音
信贈遺一兩許と金々十一兩餘を引殘ふ外二三分ハ

足と故了風寒暑濕ハ侵さる一二月小怠惰を秋時ハ
收穫ハ損あり醫藥乃價了充了たら以何を以て
酒色ハ費さ餘力を得へらんやと云是武藏豊島郡出
也ふく農丈乃辛苦を知へ

大工云一日工料に各五分飯米料一各二分をうく
但一年三百五十日乃内正月節旬風雨乃阻かるとハ
六十日休と云く二百九十日ハ銀一貫五百八
十七錢六分あり史婦ハ小兒一人乃飯米三斛五斗四
升代銀三百五十日各房賃百廿五塩醬味噌油薪炭
代銀七百目一日銀さる道具家具乃代百廿五衣服乃
價百廿五親屬故舊乃音信祭祀佛事乃觀施百廿五等都

令一貫五百十に許を費し、僅に七十に六分を
餘せし。若し二人あり、又外に厄介あり、終歲の
料を盡し、以て供給不足は何の有り餘を得、酒色に
耽樂を致しを得んと云。是は通の勞と産とを勤知の
大累なり。

菜籠を擔ぎ、晨朝に錢六七百を携へ、蔓菁大根、蓮根、芋
を買、我力に有かき、里肩の痛むに膚とせ、以て脚に信せ
と、巷を聲ふ。里蔓菁めせ、大根をいり、蓮根芋や
芋やと呼ぶ。里日乃是、巾着西ふ傾く、お新家へ還
るを見、是は菜籠に一擲する。是乃殘れ、お明朝乃晨
炊の儲か、お屋一家の妻いり、たぬく晝寐の夢や。

覺や、ら以懷ふ。巾着お巾、幼稚き子等二人、巾横堅ふ
並臥た。是、お我家へ入る。菜籠かくよせ、竈に薪さ
くへ、財布乃紐と、翌日乃本質を算除り、房賃をハ
竹筒へ納ふ。と、お娘、妻服を覺、精米の代を云。
と云。二二百文を擲出、與人、お味、嚼ふ。お醬、
か、と云。又五十文を與人、妻、小麻笥を抱き、立出る。ハ
精米を買、お行か、おへ、子供、這越、爺々菓子、の代給
と云。十二文を與人、お是、巾外、乃方へ、走出、お然、猶
残り、鈔百文、余り、は二百文、おあらん、酒の代、おや、
おん、積る、風雨、乃日の心、光り、お賄ふ、おらん、是、其、日、
乃、輕く、商人の、産、なり、但、是、ハ、猶、本、貨、を持、お身、止、なり。

是程乃本貨中持ぬものハ人ハ借ハ曉鳥乃聲きくよ
里棲鴉乃聲きくを期之以利息ハ百文了二文と
之文と云一兩ハ二百文乃利息然ハ一日乃期形
一月ハ六貫乃割と知る但借人ハ七百乃錢ハ一日
ハ一貫二三百文ハ賣上ハ七百文乃錢了廿一
文乃利息を除く其外ハ五百七十八文乃錢あり依
借ハ貸中其利あり損あり
大郡乃商人屬ハ長少打交ハ人ハあふ内了妻
子眷屬ハ女等も又ハ五人合せハ九人乃家あり
ハ精米一年ハ十石不中許以價十五六兩味噌一兩
二分許醬二兩一分許油三兩許薪ハ兩二分許炭ハ兩

二分許大根漬一兩三分許菜蔬乃料家具乃料十石ハ
兩衣服乃料又十七八兩番蓑乃料六七兩給金八九兩
地代廿二兩都令百兩余を費せハ百兩乃利を得
ハハ千兩乃本貨ありハ叶ハ但七百乃本貨あり
七百を得ハ易く千兩乃本貨あり百兩を得ハ難くと
云是を武家乃録了此を教ハ百兩ハ之百石ハ准以之
百石乃家ありハ侍二人具足持一人鎗持一人狹箱一
人馬取二人草履取一人小荷駄二人乃軍役ハ寛永十
年二月十六日乃御定あり今乃世乃價ありハ侍二人
乃給金八兩中間八人乃給金廿兩馬一足秣代九兩を
與ハ又十人乃扶持五十俵を與人ハ殘百二十九俵

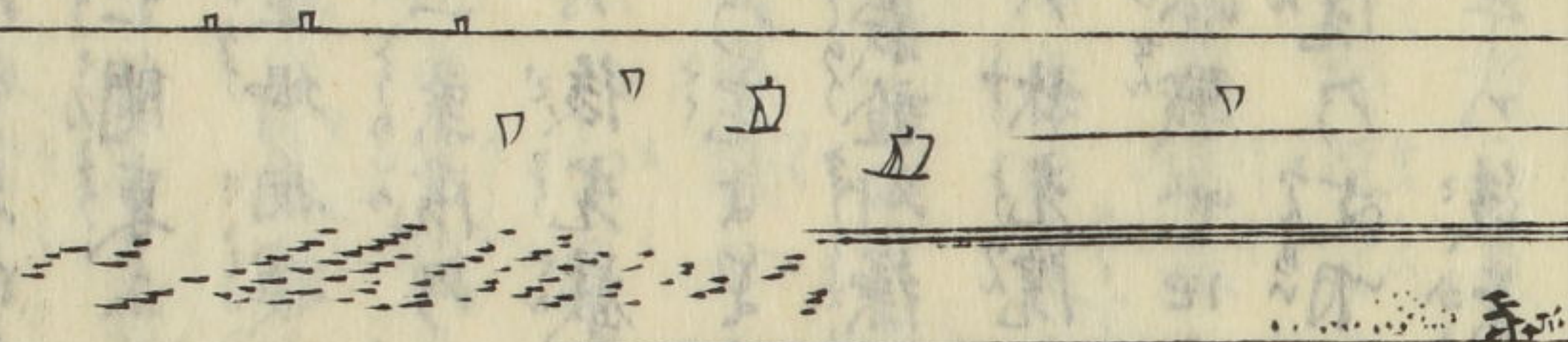
あり其内十人乃者小塩増麿代十三兩を興へ然後
我勤と武具家具普儀乃入用六七兩を引妻子下女等
と共に四人乃費用卅兩許とて總てハ五十兩餘
を利ふへ一百二十九兩を賣て十六兩必餘なり
法ふてハ年分ニ兩餘乃不足と形不寛永十年より弘
化二年より二百十三年の間ニ兩餘乃不足積りて六
百二十六兩乃借金とされ里三百石六兩乃借金
ありハ利息年分ニ十兩を拂入て七百兩乃借金
十兩了減を依て十人乃下僕を育ふとありハ是を
育ふに漸く其日々を過て乃ハ不登不出武家の縁
法を察知と云一端と云へ

○丙午丁未乃歳を災年と世俗に恐怖せしむと云日本始
里神武天皇四十六年丙午四十七年丁未より天明六
年丙午より二千四百一年の間に十一度丙午丁未
乃歳なり是れ神武天皇より孝安天皇より六度の
丙午丁未ハ日本書紀關大連ハ善中凶中是れ以孝靈
天皇卅六年丙午正月ハ皇太子を立玉へハ凶乃歳
と云ふ事ありかへ其より三度丙午丁未より
書紀ハ關大連曰く乃丙午ハ垂仁天皇十八年より
天皇より是歳丹波乃日葉酢姫を皇后とせしむ
婚礼ハ忌とあり云々其後六度丙午丁未
より是迄ハ十八度丙午ハ及ハ天皇元年即位の礼

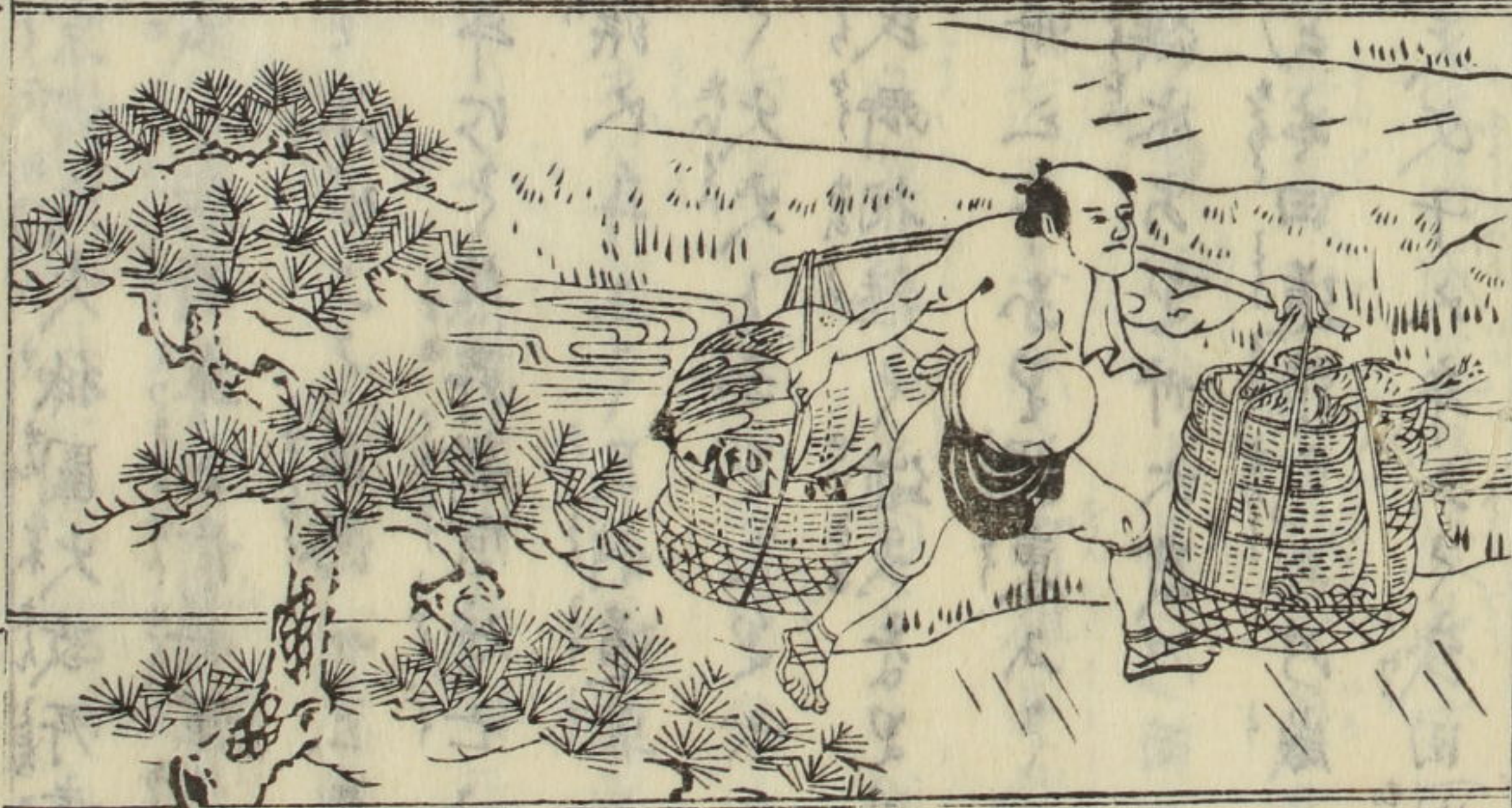
を行く廿年度の丙午ハ繼體天皇の廿年より繁余の
玉穗へ都遷乃歳か見廿一度乃丙午ハ用明天皇元年
より元穗部間人皇女乃皇后たり一歳ハ廿二度乃丙
午ハ孝徳天皇天化二年より改新乃詔を宣ふハ一歳
より我邦乃制食ハ改詔より改正ハ一歳ハ廿三度乃
丙午ハ文武天皇慶雲三年より新羅より
里調をもちハ一歳ハ廿四度乃天下ハ疫病あり歳肉ハ盗
賊起里京畿早ハ丹波但馬大倭乃凶災九國三島大風
等ハ凶ハ一歳ハ同四年ハ疫と飢と霖雨と天皇崩と凶
より一歳ハ廿五年度の丙午ハ高野天皇の天平神護二年ハ
一歳ハ淡路不見和泉飢畿内早ハ日向大隅薩摩大風あり

河内丹波飢伊勢美濃風ハ道鏡を誅王とあはせ
一歳ハ廿六年度の丙午ハ淳和天皇乃天長三年より閑
院乃大長冬副薨ハ一歳ハ同四年ハ丁未ハ大地震あり廿
六度乃丙午ハ光孝天皇仁和二年より同三年ハ丁未ハ
天皇崩ハ一歳ハ廿七度乃丙午ハ朱雀院乃天慶九年
より天皇讓位乃歳なり廿八度乃丙午ハ一統院乃寛
弘三年より異國船壹岐津島を襲ハ都ハ冷泉院火
災あり廿九年度の丙午ハ後冷泉院乃治暦二年より
告凶ハ去らハ東國ハ商鷲鷁を殺せ一歳ハ廿度の丙
午ハ崇徳院乃大治元年より大早なり廿一度乃丙午
より文治二年より堀川夜討ハ一歳ハ廿二年度の丙午ハ後

万人の
ため
一帆
を
命
を
か
く
人



其
の
縁
を
か
く
大
の
商



農
工
商
の
勢

一年の安
を
来
子
信
る
農
ま



嵯峨院乃寛元四年ふく京都大火御園火政所建仁寺
 とか焼亡関東ふく武藏守經時卒去前將軍入道大
 納言賴經卿相摸守時頼と不仕ふく上洛卅二度の丙
 午ハ後二条院乃徳治元年にく熊野新宮焼亡卅四度
 の丙午ハ後光嚴院乃貞治八年ふく足利道朝乃七条
 東洞院乃宅より失火くく大火とあり大和六年丁未
 ハ將軍義詮卿鎌倉の基氏卿相繼ぐ逝去なり卅五度
 の丙午ハ称光院乃應永卅三年ふく關東ふくハ武田
 信長乃合戦卅四年ハ秋洪水あり卅六度乃丙午ハ後
 土御門院乃文明十八年ふく右田道隆寛元乃歳々卅七
 度乃丙午ハ後崇長院乃天文十八年ふく武田村上乃

合戦あり卅八度乃丙午ハ後陽成院乃慶長十一年ふ
 く江戸御城經營乃とあり豊裏に面不垣を築せふハ
 萬代無疆乃洪基を開かせら茲凶年と云へくハ卅
 九度乃丙午ハ靈元院乃寛文六年ふく所旗本諸役人
 ハ役料賜ふりく衆ふり是又災年と云わくハ但不受
 不施乃僧乃謫せら也ハ丙午の故ふ有へくハ以
 七年丁未ハ江戸大火天下大旱形りハ十度乃丙午ハ
 中御門院乃享保十一年形り小倉原乃御鹿狩り衆ふ
 也ハ飢饉の災年ふくありくハ十一度の天明
 六年丙午ハ 光格天皇即位七年ハ江戸度々大火日
 光久能火但御官恙あり秋大水七年丁未飢饉百文り

二合と云乃白米を賣一兩一斗五升乃米か里と云
然共丙午乃露定めく災年と云へくことと云を
童蒙み告るのこ

丙午歳不坐也く誰に知た家人を齋世親王天満宮の御誓なり

三浦荒次郎義澄大介義明 足利左馬政義氏當氏

佐々木佐渡判官高氏入道道譽京極家 上杉民部大

輔愚顯山内 真田安房昌幸 武田四郎勝頼

黒田如水 本多三弥 土屋年八郎 小笠原貞慶

荻生祖来 向井滄例 岡島不梁 安達清何等なり

其盛衰榮枯人の知れあふ故云云

丙午日丁未日ハ大明日万吉日三宅吉日なり ねん

吉日 材木吉日 西門を立ふ吉日 吉日明神日

奉神領主とあり日ハ 出行吉日 嫁娶吉日と云

小丙午丁未を忌ハ何せや

○百姓乃屋敷の間ハ七間ハ奥行十五間乃定めと美濃

國可見郡天正十二年乃檢地帳了見えく是石田主顯

乃奉行せし中か也及豊長關白乃推し同也此坪數百

五坪あり 三畝十五 但是ハ軍役を充ち給く為と此

去ハ屋敷廣く三百坪ハ餘也是を三軒段と云又

又坪餘か也は十軒段と云然ふ小代間ハ七間奥行十

五間と云と長束正家石田主顯等乃心より是定めし

ふやと思ひし左ふあらハ丈内裏の頃一町内を

三十二戸主と制定めらるゝ時乃一戸主と云八間
 口丈又尺餘京間七間微弱奥行九丈五尺京間十五間微弱かゝる
 拾芥抄口行八門乃法了見えたり是に依る考ふは
 長束石田等乃私意に定めりてふ思ふは若拾
 芥抄に後く立たる屋敷割からは書物と云者ハ何時
 何乃用ふ立と云との兼ふハ知ぬハ乃知ふ乃とから
 以豊後太閤の書物よりひとは云難

○文献通考に備考ふ日本國五畿七道三千七百七十二
 郷に百十四驛八十八万三千三百廿九課丁とあるを
 何代乃を傳聞せしふや倭名類聚鈔ふ又畿乃郷三
 百四十九 東海乃郷千〇〇八 東山の郷七百四十九

又北陸乃郷二百廿 山陰の郷三百八十六 山陽
 乃郷二百九十八 南海乃郷三百廿四 西海乃郷二
 百〇九都合口子〇四十九を載たり但驛家七十六餘
 戸九十一神戸又十六を并を記し大にハ是を除き全
 く云ふ八百廿六郷なり猶又十に郷多し 太子傳ふ云
 二郷と云ふに備考 又拾芥抄に一萬三千餘郷と云ハ
 あまりふ荒唐乃説ふ近し然に云ふ八百廿六郷を以
 るに十八万三千三百廿九課丁を除ハ平均一郷ふ二
 百三十又餘に當ふ上と云と云ふ是ハ課丁乃少き
 謂ふに備考の説傳聞乃誤たりと明けしと知へる
 如し

大寶田令をよび延喜式とゆふ田一町八拾又百束と
記さ然る小延喜式

山城國田八千九百六十一町七段二百九十步

正稅公解各十五萬束

本稻五十萬四千七十九束三把

雜稻二十一萬四千七十九束三把

と見ゆ正稅公解卅萬束小雜稻廿一萬四千七十九束

三把を合せく五十一萬四千七十九束三把を本稻

乃條讓く一字を落せ里次小一町又百束を以て又十

一萬四子七十九束三把を歸り田一千〇二十八町一

段餘なり但代五十一万四子七十九束三把ハ公小收

ふ處ふく田七子九百三十三町六段二百九十步小

獲ふ稻三百九十六万六子八百十束又把を農吏乃

得ふと知へく上ふ取とさる一公強下ふ得ふとさる

八分半強と聞ゆあは延暦十六年六月庚申乃詔ふ古

者什一ふく稅以あはを正中と云三代因循く頃

嚴をささる國家薄く征く農を利し民を恤む云々今

より後收租乃法又別ふ所管の所段を計り仍く十分

と取し八を收しめく二を免せよ其乃八分内を計

田分損さるるくは各門害さる産業全く亡ひ大

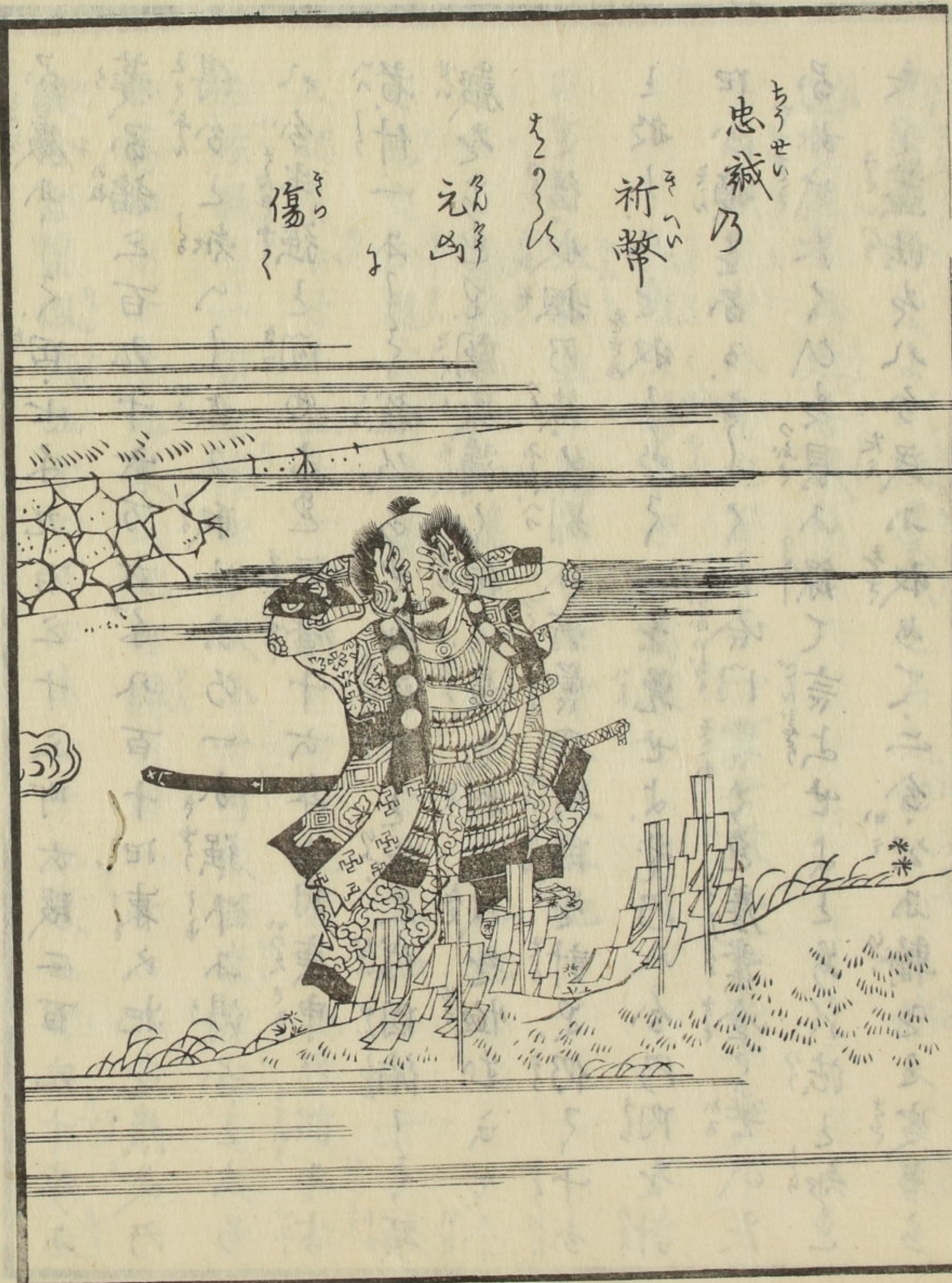
ふ如代大くひふ具ふ録て言上せよとあは法と知ゆ

大里蓋法ハ八分民小收めて二分公小輸を定めら

大垣城の内



忠誠乃
祈幣
元凶
傷



也川並共臨時不用捨ありて山城乃國の如く八分半
強を民の與ふるに有べし又同書ふ

大和國田萬七千九百五町九段百八十步

正稅公廨各二十萬束

本稻五十五萬四千六百束

雜稻十五萬四千六百束

と記せり田萬七千九百又町九段百八十步ふ稻九
八百九十八万二千九百七十八束ありて此米四十
二万七千六百四十八石七斗六升田令外一束又あり
升と云ふは後人
今量ふと三十七万四千二百三十四石三斗八升又合
と形ふ是又大和一國乃總高形なり國花万葉記外大和國
知り多に十四万四千

百二十石に石代内より又十又万に又六百束を公へ輸
と云ふ是れ十分の一ふ是れよりふ六釐の免かり
然れ昔の官人の産之く俸料一分乃人の唯一ふ束
僅ふ朝夕を支る衣服不足以遷替乃日京外還ふ糧無
と仁明天皇承和云
二年三月の条
是鑄錢司乃官人京より長門へ下り任限をく京

へ還ふ小窮を云ふ一分乃人とは使生を云天平
九年但馬國稅帳に使生將後一人と見ゆ也此の將後
を連と云ふ者一千束乃稻子米又十石今量ふと
十一石八斗餘ふ當ふ妻子等を養ふ將後を買たら
んふは有餘ありへうし

農民の財賄く太宰の監ふ佛外もかびる給人の如く
源氏物語を白氏文集の佩服體を主と爲く作を
形もは寓言かぐ事實の當時の有るやうに同也
太宰乃大監の府中太宰有縁の輩ある任を職
原鈔に見えぬ如く京より下る官からく太宰所
管乃國々乃兵士より登庸せんと爲くは玉葛の
巻ふ大吏乃監とく肥後國の族ひろく彼處の
てをわづえあり勢ひいり免る兵士ありけり
見ゆ兵士と云ふ丁一かあり其身農民たるを明
けき如き
○熊谷大膳大夫平直之の關白秀次公ははるる老後の

列た里關白太閤乃心違人々文禄四年七月高
野山より生害あり後直之を嵯峨乃二尊教院より
あそ色共より人から同へる嵯峨野踏分り奥
乃古寺と詠して終る爰より腹切り失たり
のよ小貼る二直之三萬石を領り川也は即從若年
尊教院よりあり金銀米錢庫を拂り皆分ち與へ思ふ立退せ
小姓七人を供とあり寺門に至る三人より負せ來り
革袋を取中より朽葉色乃帛小包し黄金を七包出
る七人より配與へ殘るをば自身提り客教より昇り暫
本尊を祀りさる小姓共より何地へあり共心次第に退
屈しと暇とらせ川より七人トを揃り君の成玉をん

様を見つ後ふと云く更ふ退んとせ以兎角なる内
小検使時刻移りぬと催せば直之心得たりと云儘ふ
願切く俯ふ臥ぬ檢使見畢二尊教院の上人子遺骸を
葬るへき地定めり立歸りたり然七人の小姓共客殿
乃後の山を堀穿ちるに柩を興りて藏め尔後心閑り
本尊乃前ふ居並ひ互ふ謀け敷の殿乃かく成玉さん
迄と申合ひる本意今を協ぬ何事と心り掛るなり乃
ての有へき形あら面々乃意を迷く今より後乃事を
計さんとありとそ中ふ中弱く十六七許ふやと
見ゆかり殿乃柩を石田沼部お里彼を討とやと思ふ
と云時ふ年乃最長たふり宛恐怖く彼ハあ乃見ゆふ

ふ乃陰二尊教院より近ふ餘多の人数もちたり我々
何とく々向ふへきや去ての思止りて其他乃謀略
を同とやと云ひ又一人我等の殿乃菩提乃為小回國
せんと思ふと云ひ又一人の町人お成り世を安く過ん
と云終ふ三人の町人お成り決り四人の回國せり
そに定まり住持上人子對面を請け革袋ハ亡主の遺
物ふ御取置也追福乃資お成せ玉人へり六七年の
後ふ又々御世話お成りへりと各東西へ立別れ去
かく六七年過り慶長五年の九月誰と云知る若侍五
人二尊院お入来り直之乃墓の前お坐り念佛高らかに
小唱各一同り腹切たり住持上人馳来り見せり昔見

た里一ちり面象めんさうかゝるかゝる不能ふでくさ色いろは直ただ之のう小姓こしょうか里り然しかも
昔むかしハ七人しちにんか里りう五人ごにんハ爰こゝハ生害せいがい一ひと残のこる二人ふたにんハ如ごとく
何なんせしふやと疑怪ぎがいく思入おもひい處ところハ一人ひとり乃すなはち脚力けつりき走來そうらい里り是こゝ
ハ熊谷殿くまがやどの乃すなはち小姓衆こしょうしゆあふハ一ひと是こゝハ状屈じやうくつけ給たまへ里りハ一ひと
云いハ頭かぶヲ掛かたふ文箱ふたばこを取と出だし角かくヲ舐なへ見みる膽たんを
消け是こゝハ大津おほつより出いでハ二人ふたにん乃すなはち士衆ししゆハ京きやう乃すなはち政所せいじよハ
參まゐせ玉たまハ代方しろがたハ人ひとハ世玉よたまハ一ひと五人ごにんハ小御冬こみふゆあはせと乃すなはち
使つかハ以者いしやをと云然いふしかハ一ひと可よ方かたハけはハ京きやうハ歸かへ里りハ
云々いふいふハ是こゝハ告つ止とハ京きやう乃すなはち二人ふたにんハ驚おどろかろ有司うしハ暇いふ
請こふ二尊ふたそん教院きやういんハ人ひとハ中なかつ腹切はらきりハ二人ふたにん共ともハ死した里り寺家ぢけ
ハハ更さらハ驚おどろ政所せいじよハかくと申まう止とハ有司うしハ寺家ぢけハ人ひと

作法さうは乃すなはち如ごとく檢察けんさつハ懇こんハ取置とけハ平へい中なかつ沙汰さたハ還かへれ里り後のち
ハ妻つまハ一ひと尋たづねハ代しろ七人しちにん換かハ身みを招まハ京きやうハ仗見ぢやうけん佐和さわハ
ハ往還かうかんハ一ひと三成さんせいを規かハと云共いふとも能よ間まハハ年とし月つきを送おく
ハうちハ代しろ亂らん出い來きハハ今いまハ天下てんか乃すなはち御敵ごてきハハ里りハ
我われハハ私し乃すなはち仇あひハハと云共いふとも日頃ひごろハ志こころハ
ハ如何いかハハ一ひと箭射やんやいハ者ものハハ思おも起おこハハ大垣おほがきハ
里り竈殿かまどの乃すなはち下した乃すなはち火焚ひたきハハ為なハ城しろハハ心こころを推おハハ敵てきハ
強つよハハ面おもてを合あハハ及およハハ然しかハハ今いまハ日ひ關原せきげんハハ打うちハ
ハと云曉しんあつ七人しちにん乃すなはち者ものハハ角かくハハ意いを竭つきハハて眼めをたハ見み合あ
ハハ得えハハハ武運ぶうんハハ盡つきハハハ一ひと個こハハ曉あかつハ
見遇けんぐハハ是こゝハ里り男をとこハハ止とどハハ法師はうしハハハ為なハハハと誓ちかて

竹乃串ふ幣挿る七本同一様了城乃墮下ふ立たは曉
乃仄暗るふ幣の吹靡を何と見けん云成俯く是
を見るる誤る左乃眉根を去ちか了突たは血流
る眼る入けふを押拭おし拭け馬る乗るお陣せし
かとも其疵痕さかり竹折る痛さかき去かりけ
まの軍乃機發を失ひしと斯是併から七人の忠志
深き故る仇乃身ふ第一番乃疵を付し王眞加乃至と
思へん今ハ世ふ残り惜るさか去來嵯峨了行る至
乃跡を追へしと路を急るけか了天津ふ關守ふ諦
らせし時大垣ふ誅せらる熊谷内藏九る者の者
お里と云人の有る故了京乃政所へ速治し其時五

人の何とく越し障か嵯峨へ至しと諸京の
政所ふ勘問の後直る小姓大ふ台明けか何
と軍の群ふ入るさる同也ふ小虎以軍の群
ふ入る其等る仇了あは天下の仇ふ去の軍の
群を離る私乃仇を報せん支度せし故態と兵仗を
帶せしと申せしとや次了二人乃状を披け大
津京乃始末細々と記るや御自害にへ跡より追付
ひちんとありしと云是依る思へん最時ふ回國せ
むと云し町人成んと云ふ共ふ一時乃權謀
ふ成る主乃仇を復さる為か里と知た是是二言
院ふ傳ふ如か里惜へ斯ふ義士乃名さへ失ひし

出と或云稲富平九郎牧右馬允山井太力五郎星川新
三郎伊波小六郎都筑福一辻島之丞七人等と

○慶長十八年霜月小書左里見安房守義康家中有限
帳小給令之覺令一兩子付米五俵勘定也三百俵小扈
從十人八百俵中扈從十人千俵歩の元又十人又子百
六十俵馬乗百七十二人 是ハ大方 又子二百二十俵是
輕之百廿二人 内廿人ハ 又子俵中間舟方臺所中間馬
廐乃者道具持以上千人 是ハ大方百姓之と見也此ハ
小扈從ハ卅俵 金六兩 中扈從ハ八十俵 金十六兩
歩之衆ハ廿俵 金二兩 馬乗ハ卅俵
是輕ハ十俵 金二兩 中間ハ又俵 金一兩

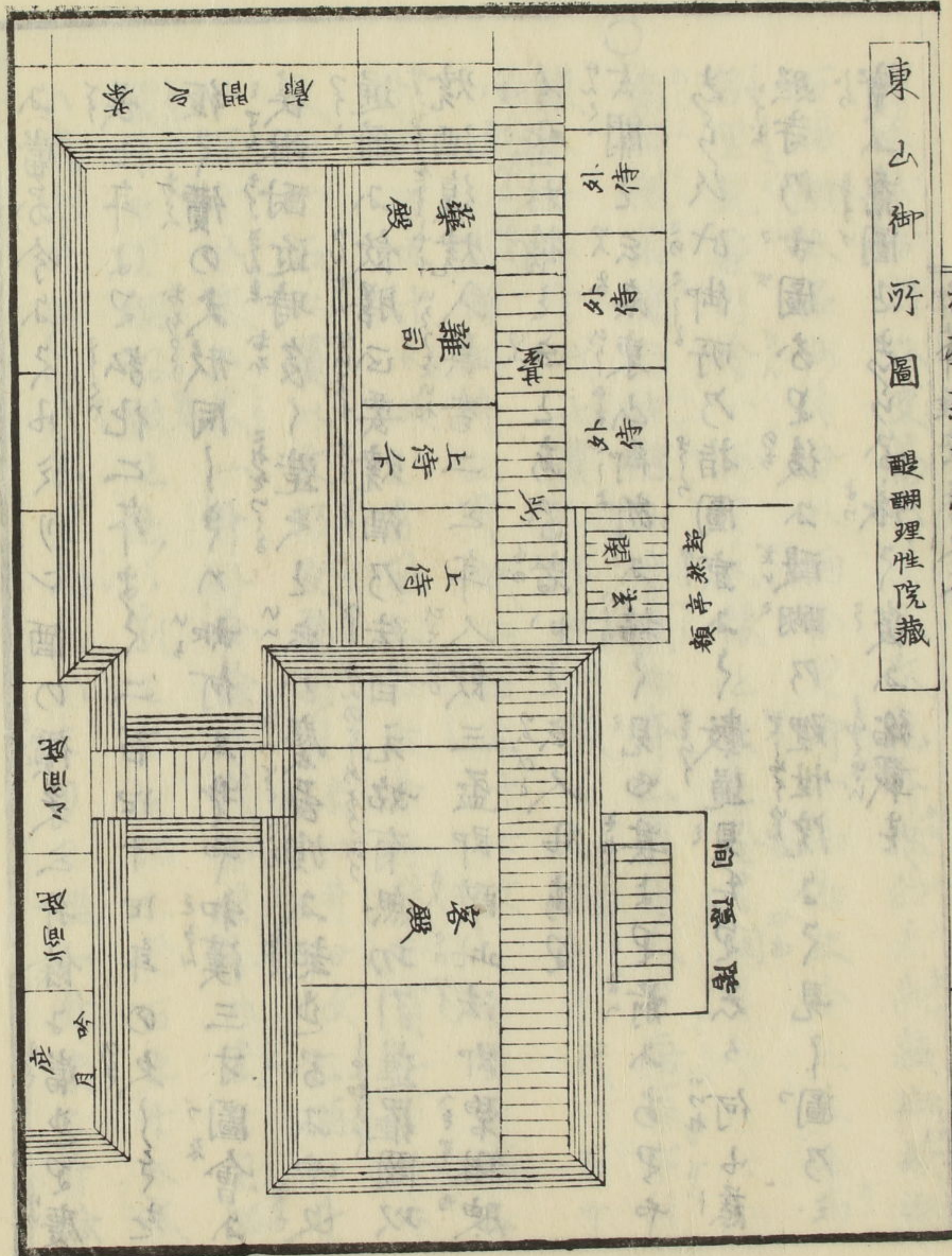
と知へ 又慶長十八年乃春書たふ浮田中納言秀家ハ
家中有限帳小是輕ハ十人八百石とあるハ是ハ所謂
是輕ハ廿石と知る組鐵炮元二十九人又六百六十石
弓元三十人又二百石と見也此ハ
鉄炮元弓元ハ卅石 是輕ハ一俵と 同也里見家と浮田家
とハ禄大小同一から鉄ハ是輕と云名ハ一か通と云
給分小違ハある形
全一兩又米又俵と云ハ二石又里慶長十八年ハ駿河
小判通用也此ハ同方ハ各八分あり又文金百六十
又兩百二十八文餘と同一と聞ハ一石乃價元文金二
分ハ各八分ハ籠餘ハある百俵ハ十石あり又十三兩

卷一百一十五

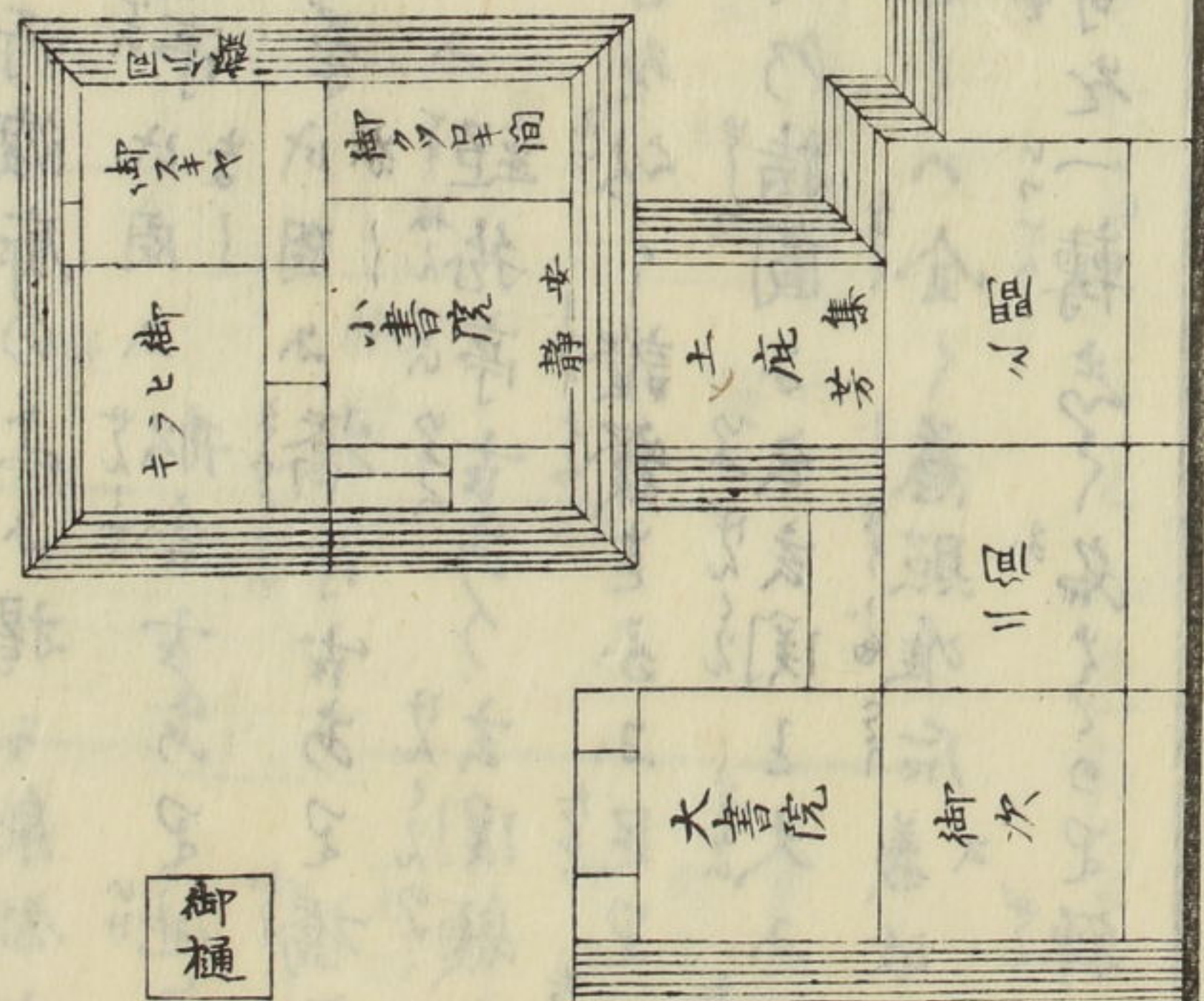
是年去分許ふ交易へ一元改元冬江戸御藏御張紙
 百俵卅八石ふく廿八両お里即一石を五分五分
 別里見家乃令一両ふ俵と云と令同
 南都般若寺乃古牒ふ慶長七年三月十三日厨事下
 米三石六斗代七貫二百卅二文 上酒七斗代二百十
 八文 下酒二斗二升代二百三十七文 米一升廿文 上酒一斗
 升代百九十文 ときお里三石六斗乃代七貫二百卅二
 文ハ一石二貫八文乃交易形に 米一升廿文 上酒一斗
 二百十八文ハ米一斗八合餘乃代お里今ハ米より酒
 價倍せ里酒奴故ときお里三リン酒三升百九十八文
 ハ米九升餘乃代お里今ハ米より酒一升米三升餘

〇玄關と云名東山御所ひんかい入始ひんかい見也其それより前さきにあまや
 志しらふ以御所このこ乃指圖京さうふく數通見さうた是志しら何いも慈
 照寺しょうじ乃古圖こお里後のち不醍醐たいこ乃理り性院しやういんより見みる圖ず乃之
 實じつふ舊圖きうずと志しらふ依よる爰こゝふ縮載しゆくさいと

東山御所圖 醍醐理性院藏



南禪寺記小落菴林乃
南ニ丈餘小坂をよむ
は玄閑入通以と云い
禪刹乃玄閑入一と云
指圖の玄閑と同一か
らい

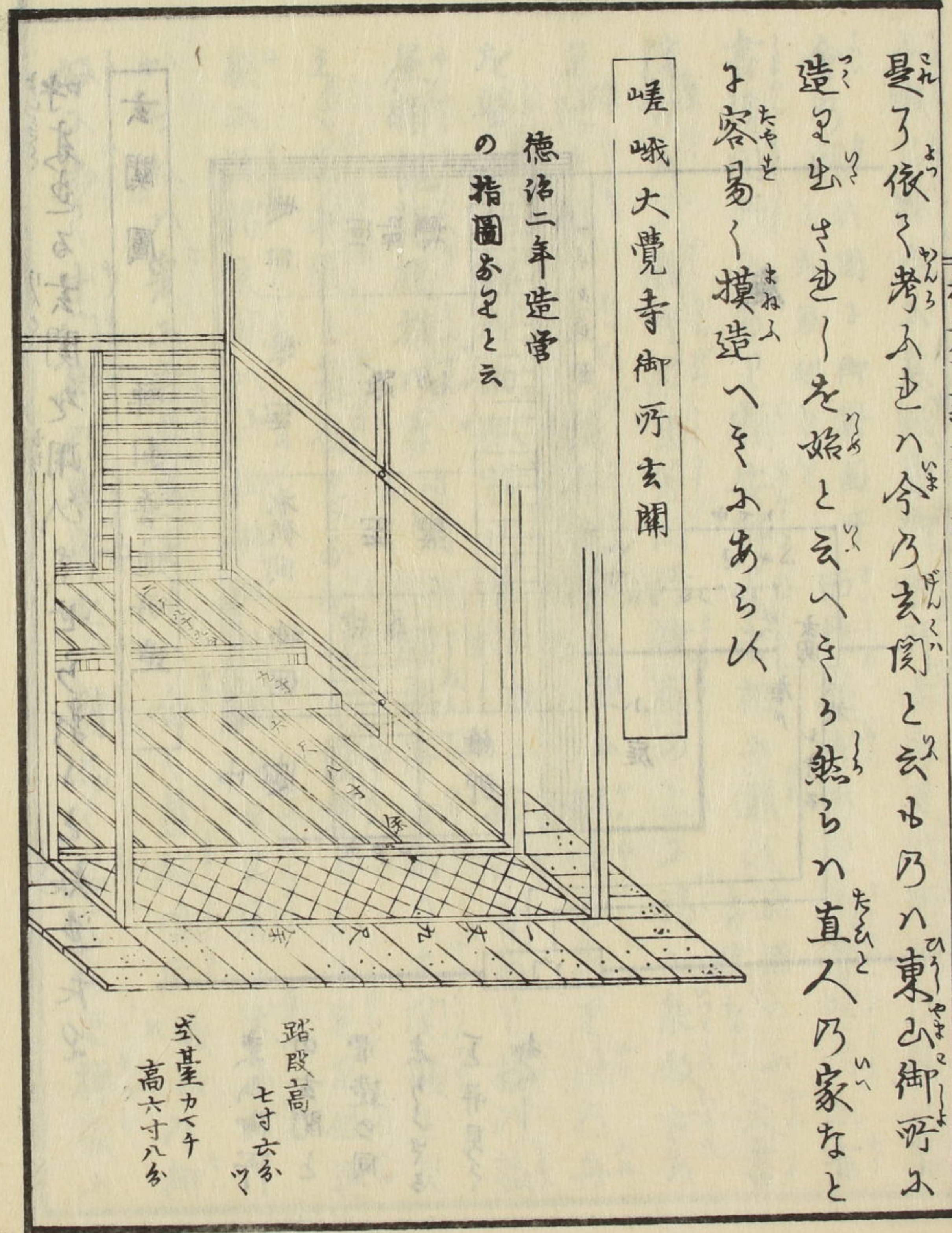


此小書院所スキヤ等今現存
慈照寺乃東求堂なり

是了依^よ考^{かん}入^い也^やハ今^{いま}乃^ん玄^{げん}関^{かん}と云^いハ乃^ひ東^{とう}山^{さん}御^ご所^{しよ}ハ
造^{つく}出^いせ也^やハを始^{はつ}と云^いハさう然^{しか}ラハ直^{ちやう}人^{にん}乃^い家^けなと
子^こ容^{よう}易^ぎハ摸^も造^{ぞう}ハさふあらハ

嵯峨大覺寺御所玄關

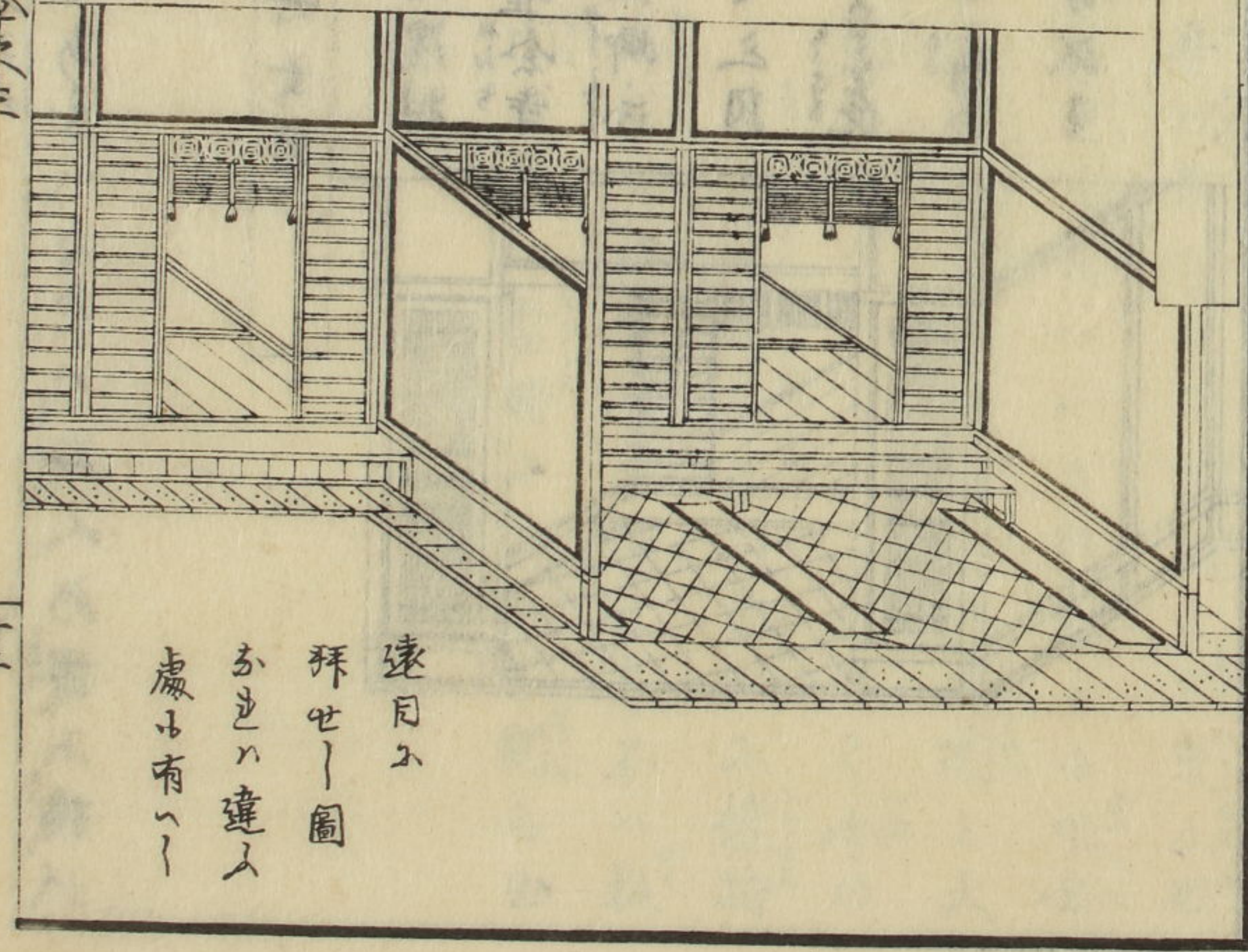
德治二年造營
の指圖ありと云



踏段高
七寸六分
式基力
高六寸八分

攝家玄關

職原鈔^{しつげんしやう}ハ先^{まづ}一^{ひと}人
とハ當時^{たうじ}西^{さい}流^{りゆう}ハ
法性寺^{ほふしやうじ}入^い道^{だう}関^{かん}白^{はく}
後^{こう}胤^{いん}近^{きん}衛^ゑ九^く條^{じやう}是^{これ}
也^や近^{きん}衛^ゑ又^{また}分^{ぶん}二^{ふた}と
か^か里^り九^く條^{じやう}流^{りゆう}又^{また}分^{ぶん}
三^{さん}と^とか^か分^{ぶん}先^{せん}途^とを
遂^{すい}ら^ら也^やハ共^{とも}諸^{しよ}大^{たい}
臣^{しん}家^けヲ差^さ別^{べつ}あ^あ分^{ぶん}
へ^へう^うハと云^いハ然^{しか}

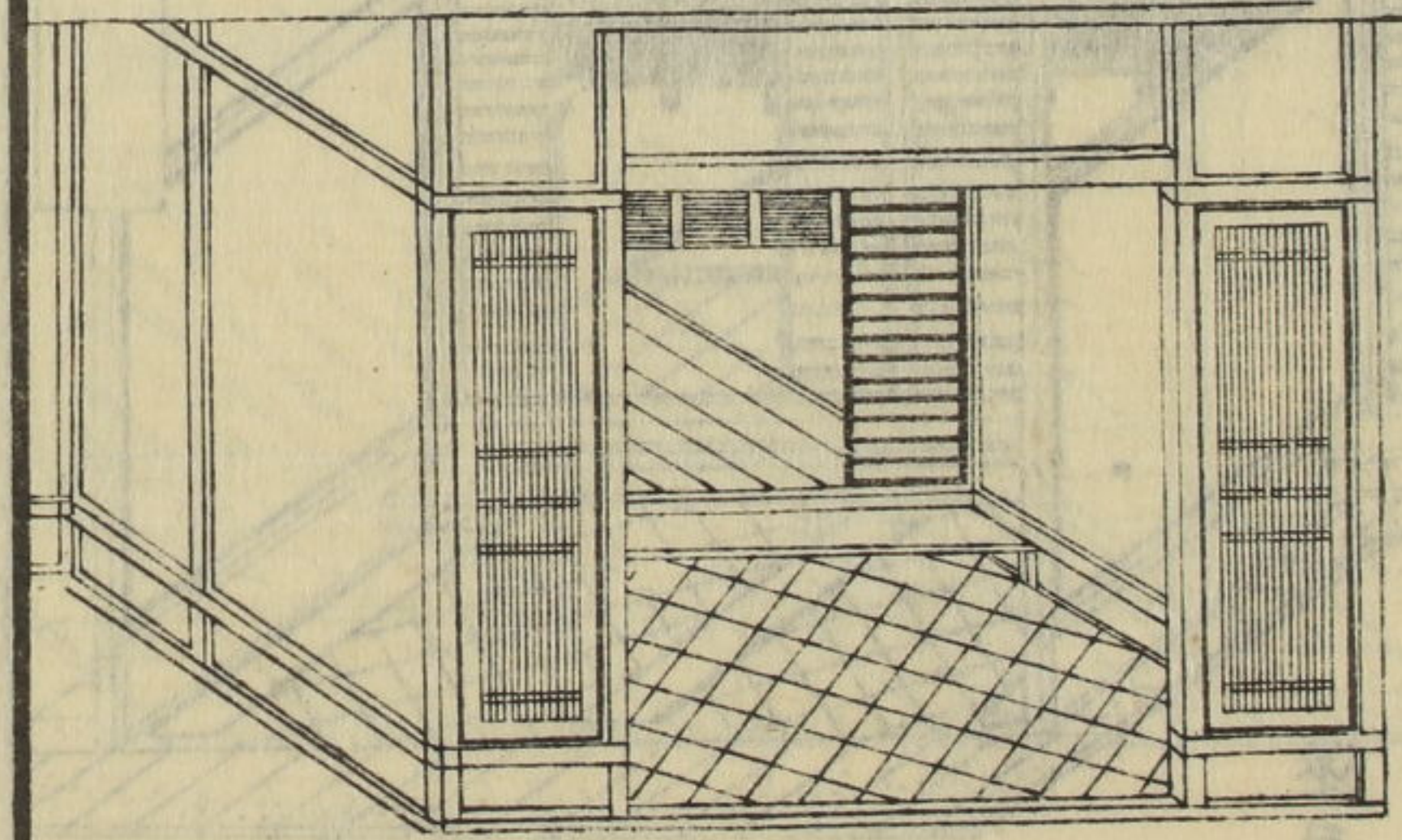


遠月ハ
拜せ一圖
か^か之^の違^{ちが}ハ
處^{ところ}ハ有^あへ^へ

ハ如是當造そのときト其本據そのもとあるハ々々ハ廢人たふし乃謾むだニ議かた以
ヘさハ非あら以

寶篋院將軍家御所玄關

近江國犬上郡あまのくにのすけいぬがみ上院村
唯念寺ゆいねんじ乃玄關けんくわんあり唯念寺
ハ寶篋院將軍義詮卿たけしうん正
平七年閏二月しへいしちねんくわんにがつより三月
より住玉きよたまひひハ外うへありを既
新造しんぞうせしハ指圖さうずハ舊もとの
通とほハはハはハ改あらたメしハと
云いハ



唯念寺ゆいねんじ乃營造實そいうハ正平以前しへいいぜんならハ玄關けんくわんハ亦東山殿
乃前まへニ在あト云いハハ証しやう大里たいりト云いハハ然しかトハ唯念
寺じ乃玄關けんくわん磚たんあり櫓りう子しあり肩庇かたひあり禪刹ぜんせき乃玄關けんくわんト大
同小異どうせういのい今時いま乃玄關けんくわんト似にハハハあらハ依よりハ今いまの
玄關けんくわんハ東山御所とうざんごしよより定さだムハ又また辨慶某はんけい乃書記しきハ鐘持かねもち
侍さむらい乃家いへからハハ玄關けんくわん無用むようト伊賀教被仰いけのうトあるハ板
倉伊賀守勝重朝臣からいけのしやうじゆうト聞きこハハ當時そのときよりハハ制せいハハ出
来きハハハハハ

柳菴雜筆卷之三終

新嘉坡華文書院

其一二
余初到嘉坡時
於此處
大國之東
同小果
昔此大國
八前
和

